

哲学からみた言語

飯田 隆

1 はじめに—言語の存在論と認識論

「哲学からみた言語」というタイトルには、「言語」と呼ばれる何かがあるという前提が含まれています。そして、この前提は疑いなく正しいように思われます。地球上にはさまざまな言語があり、そうした言語のなかには、日本語のようにわたしたちに身近なものもあれば、わたしたちがその名前も聞いたことのないようなエキゾチックなものもあります。だが、そうした言語が「ある」というのはどういうことなのでしょうか。たとえば、地球上でいま話されている言語の数をはるかに越える数の言語がこれまで存在したが、いまは死滅して存在しないといった話を、よく聞きます。そうすると、言語が「ある」とか「存在する」と言われるためには、そうした言語を実際に使う人がいるということが必要条件となるように思われます。すでにそれを使う人がいない言語であっても、それで書かれた文書や記録の類が残っている限り、それはまだ存在しているのではないかといった反論に対しては、それは、そうした言語がかつて存在したということの痕跡がまだ残っているにすぎないと答えられるでしょう。

だが、問題はそれほど単純ではありません。日本語や英語といった言語全体を単位としてではなく、語のような単位について考えましょう。たとえば、「雨」という語を取り上げます。この語をひとはこれまでに何度も使ってきたでしょうし、また、いろんな場所で聞いたり見かけたりしてきたでしょう。だが、そうした異なる機会ごとに「雨」という同じ語に出会うということは、どのようにして可能になるのでしょうか。異なる機会に見かけた人や車が、同じ人や同じ車であることは、そうした人や車が、わたしたちとたまたま出会うとき以外にも、必ずどこかにあり続けているからこそ、そうだと信じられるのです。だが、「雨」のような語が、人や車と同じような意味で、存在し続けていると考えるのは困難です。だれにも使われていないときにも、それは存在しているのだと言うならば、「どこに」という問いにどうやって答えるのでしょうか。では、語は、だれかによって使われているとき、その時その所に限って存在するのでしょうか。しかし、このように答えることには抵抗を覚えるでしょう。日本語には「雨」という単語があると言うとき、その単語はある特定の時と所にしかないものとみなされているのでしょうか。それはむ

しろ、どこもいつとも特定されることなく存在すると、わたしたちは考えているのではないのでしょうか。そして、日本語のひとつの単語について、そのように考えるのなら、日本語全体についても同じように考えるべきではないのでしょうか。つまり、言語は、その話し手がたまたま、いるかどうかとは独立に存在する何かだと考える方が正しいのではないのでしょうか。

こうした類の問いは、哲学のなかでも存在論と呼ばれる部門に属する問いです。存在するもののなかには、どんな種類のものがあるのか、異なる種類の存在者のあいだにはどのような関係があるのか、といった問いが存在論の典型的な問いです。わたしたちが最初に挙げた問いのなかには、言語の存在はその話し手の存在に依存するのかという問いと、そもそも言語とはどのような種類の存在者なのかという、少なくとも二つの問いが含まれています。また、そこで、語「雨」がどのような種類の存在者かを考えるために、同じ語であるとはどういうことなのかと問うのが自然だったように、何かがどのような種類の存在者であるかということは、その何かが「同じ」であるというのとはどういうことなのかという同一性の問題と密接にかかわります。言語の同一性ということとはさまざまな仕方で現れます。万葉時代の日本人が使っていた言語と現在のわたしたちが使っている言語とは、同じ言語と言うべきなのでしょう、それとも異なる言語と言うべきなのでしょう。あるいは、現在の日本語であってさえ、それを話すひとのそれぞれで、語彙も違えばアクセントも違ったりします。にもかかわらず、みんなが同一の言語を話していると言えるのでしょうか。ただし、言語の存在論に属する問いとは、こうした問いそのものではありません。これらは、日本語をその対象とする言語学的研究に属する問いだからです。だが、日本語というひとつの言語に限らず、言語一般について「同一の言語」であるための条件は何かということも当然、問題になります。そして、この一般的な問いこそが、言語の存在論に属する問いなのです。

哲学のなかには他に認識論と呼ばれる部門もあります。言葉の理解ということがどのようにして可能なのかということは、言語の認識論に属する問いです。日々の言語的やり取りは、きまった数の言い回しだけに限られているわけではありません。ひとは長い演説や複雑な文章を理解できます。そうしたことが可能なのはどうしてでしょうか。そうした演説や文章にこれまでに出会ったことがあるからではありません。ひとは言語を通じてまったく新しいことを知ったり思ったりすることができます。しかも、多くの場合、こうしたことは意識的な努力なしにほとんど自動的になされます。どのような認識的機構がこうしたことを可能とするのでしょうか。

この問いは、言語の認識論に属するもうひとつの重要な問いと密接に関係しています。それは、ひとは自身の母語とどのような認識的関係にあるのかという問いです。子供は一定の年齢に達するならばふつう、まわりで話されている言語を理解し、自分でも用いるようになります。こうした達成は、そ

れよりも一年近く前にふつう可能となる歩行とはちがって、知的な達成であるとみなされています。だが、それが「知的な」達成だとみなされるのはなぜなのでしょう。こどもは自分のまわりで話されている言語について何かを知ることによって、言葉を使えるようになるのでしょうか。もしそうだとするならば、何を知ることによって、言葉を使えるようになるのでしょうか。

言葉を使えるようになるためにひとが知らなければならないことが何かあり、したがって、言語の話し手はそうした事柄の知識を備えていると言うとしましょう。だが、そうした知識は、ひとが一般に「知識」という言葉で呼ぶものとは、ずいぶん異なる特徴をもっています。まず、ひとは、ふつう、自分の母語について持っているはずの知識の内容が何であるかを言うことができません。日本語の話し手は「てにをは」をだいたい正しく使うことができ、それは、「てにをは」の正しい使い方を知っているからだと言えるでしょうが、「では、その正しい使い方とはどういうものなのか詳しく説明してほしい」と頼まれても、たいていのひとは困惑するにちがいません。つまり、言語の知識は、きわめて基本的な種類の知識でありながら、独自の性格をもつものです。ここに、言語の認識論の認識論一般にとっての重要性があります。しかし、ここでは、主として言語の存在論の問題に関して論じましょう。なぜならば、「言語の知識」の性格という問題はしばしば論じられる機会がある¹のに対して、言語の存在論について議論されることは比較的まれだと思われるからです。もちろん、哲学の異なる部門は相互に無関係ではない以上、言語の存在論は言語の認識論と無関係ではありません。したがって、認識論的問題は以下でもときどき顔を出すということを承知しておいた方がよいでしょう。

2 言語表現のタイプとトークン

ひとつの言語を完全に特徴づけるということが仮に可能だと考えます。それはまず、言語の基本要素である語彙を特定することから始まるでしょう。多くの場合、語はそのはたらきのちがいによって、いくつかのクラス、すなわち、カテゴリーに分けられます。完全に特徴づけることができるような言語であるためには、語彙の全体は有限でなくてはなりません。さもなければ、任意の表現がその言語に属する語だけからできているかどうかの判定が、いつまで経っても終わらないということがありうるからです。語彙が特定されたならば、つぎには、語彙に属する要素を組み合わせる複雑な表現を作る規則が述べられる必要があります。語の組み合わせは句という単位をつくり、句の組み合わせによって文が生じます。語を単純な表現、句および文を複雑な

¹ 私自身もこの問題については（その入り口までだけという中途半端なものです）論じたことがあります（[2]）。

表現と呼びましょう²。

複雑な表現の構成の際、無制限の再帰を許す言語においては、無限に多くのたがいに異なる複雑な表現、したがって、無限に多くの文が作れることとなります。もちろん、こうした無限に多くの文の全体が実際に言われたり書かれたりすることは、ありえません。それどころか、決して言われたり書かれたりしえない文があることは確実です。ひとつひとつの文—もっと一般的には、複雑な表現—の長さは有限でしかなくとも、無制限の再帰が許されているならば、それはいくらでも長くなりえます。したがって、宇宙が時間的にも空間的にも有限であるという現在の物理学での宇宙観が正しければ、その文を使うためには、宇宙の全歴史を越える時間や、宇宙の中には収容しきれないスペースが必要だということがありえます。論理学の言語に現れる連言についての規則といったごく単純な規則からさえ、こうした文を作ることができます。 p から始めて、それに同じ p をひたすら連言によって追加していくだけでよいからです。

言語が無限でなくとも、その言語の文法では許されているのに現実に出会うことのない複雑な表現はたくさんあります。たとえば、仮に日本語が無制限の再帰を許さない有限の言語であるとしましょう。しかし、それでも、日本語は、その文法で許されているにもかかわらず、これまで用いられたことがなく、また、これからも決して用いられないような表現を多数含む程度には複雑です。さらに、まったくの偶然からだれにも使われることのない日本語の文があることも十分考えられます。

つまり、よほどきびしく再帰が制限されていて、構成できる文の全体が数え上げられるような言語でない限り、言語の文法にかなうと予測される文の多くは、用いられることが決してなく、それゆえ、どのような仕方でも発せられることのない文です。こうした「実現されない」文について、それが可能的にのみ存在すると言うのは、一見もっともと思われれます。言語において可能な文の全体を定めるのが、文法の役割のひとつであると違和感なしに言えるからです。もちろん、宇宙に収容できないほど巨大な文も「可能な文」に分類するのですから、ここで問題となっている可能性は、物理的可能性ではなく、むしろ論理的可能性に近いものでなくてはなりません。

ところで、実現されない文が可能的にのみ存在すると考えることは、文にとっての存在とは時空的に存在することである、言い換えれば、文は時空的存在者であると考えことです。なぜならば、いましているように、文に関して、単なる可能的存在と現実の存在とを区別するならば、現実中存在するということは、それが実際に、つまり、ある特定の時と所において発せられること以外にないと思われるからです。

² 自然言語の場合、語は、音声・書字・身振りなどの組み合わせによって表されますが、論理的研究や計算機の制御のために作られた多くの人工言語の場合、語は単純な記号として扱われます。ただし、自然言語において語がさらに音や字の組み合わせに分節化されるという事実は、以下の議論に大きな影響を与えるものではありません。

だが、他方で、文、より一般的に言語表現についてわたしたちが語る仕方には、わたしたちはそれらを時空的存在とはみなしていないと思われる節もあります。それは、「同じ文」という言い方をわたしたちがどのように使うかに現れています。つぎの例をみてください。

今年の夏は記録的な暑さだった。

今年の夏は記録的な暑さだった。

これを見てわたしたちが言うことは何でしょうか。それは、たぶん、こうではないでしょうか—「ここには二つの文がある、でも、その二つは同じ文だ」。しかし、こんな言い方がどうして許されるのでしょうか。同じ種類に属する二つのものがあるならば、その二つはたがいに異なるものでなくてはならず、その二つが同じであるということはありません。たとえば、「ここには二匹の犬がいる、でも、その二匹は同じ犬だ」と言うことは明らかに矛盾しています³。

この矛盾を解く鍵は、「文」という言葉は二通りの意味で使われるという点にあります。よくあるように、矛盾の外見をここで生み出しているのは多義性です。一方で、「二つの文がある」と言われたときの「文」は時空的存在者としての文です。他方、「その二つが同じ文だ」と言われたときの「文」を、同様の時空的存在者とみなすことはできません。後者を「タイプとしての文」と呼び、時空的存在者である前者—「トークンとしての文」と呼ばれます—から区別します。いま挙げた例で言えば、「今年の夏は記録的な暑さだった」という文が二回繰り返されているわけですが、最初に現れている文と二度目に現れている文は、現れている場所がちがうのですから、トークンとしては異なる文です。しかし、「同じ文が繰り返されている」とわたしたちが考えるのは、それがタイプとしては同じ文だからです。同様の区別が、文だけでなく言語表現一般にもあることを了解することはむずかしくありません⁴。

トークンとしての文は、一定の時と所に位置を占める具体的な事物です。それは、一連の音声や身振りからなる出来事であったり、紙の上のインクのしみのような物的対象であったりします。トークンとしての文は、ある一定の時と所に縛り付けられた存在です。しかし、しばしばなされるように言葉が道具にたとえられるとき、言語表現は繰り返し用いることのできるもの、同じままで異なる時と所に現れることのできるものとみなされています。まさにこうした存在が、タイプとしての言語表現です。

子供の字の汚いことを叱ったり、相手の言ったことが聞き取れなかったと苦情を言うような場合は、トークンが問題になっています。しかしながら、言葉に関してわれわれが言うことの大部分は、タイプを問題にするものです。

³ しかし、後に本文でも触れるように、この文についてさえ、それが矛盾とならない解釈があります。つまり、「犬」にもまた、タイプとトークンの両方の解釈があるからです。

⁴ さらに、前々註で触れたような、もうひとつの言語的分節の構成要素である、音節、文字、身振りに関しても、タイプとトークンの区別が存在することも明らかでしょう。

相手の挙げた名前が聞き取れなかったと言うひとが、続いて「いま言われた名前は何か」とたずねるとき、そのひとが答として望んでいるものが、タイプとしての名前であって、トークンとしての名前でないことは明らかです。なぜならば、トークンとしての名前は、一回発せられたならば、もはや繰り返し現れることのできないものだからです。

ある種類のものがある場合、その種類がどのようなものから成っているかをはっきりさせるための、一つのやり方は、その種類に属するものがたがいに同一であるのは、どのような場合であるかをみることです。「同じ文」や「同じ言語表現」ということでわたしたちが何を了解しているかについての、いま行った考察が示すことは、文、より一般に言語表現を、わたしたちは、時空的存在ではないタイプの存在者だとみなしているということです。また、タイプは、いくつと数えられ、名指されうるものであるゆえに、述語的なものではなく、名前をもつことのできる対象であるとみなされるべきです。時空中に存在する対象を具体的対象、時空中には存在しない対象を抽象的对象と呼ぶことにしましょう。そうすると、タイプは抽象的对象であるということになります。

3 言語的タイプの存在論

抽象的对象の典型は、数や純粋な集合のような数学的对象であるとみなされています。こうした対象は、存在するならば必然的に存在します。同様に言語的タイプも必然的に存在すると考えてよいでしょうか。この問いへの答えは、言語的タイプが存在するとはどういうことかにかかっています。

少なくとも、語のような単純なタイプに関しては、タイプの存在は、そのトークンの存在と等しいように思われます。トークンをいっさいもたない語が、それにもかかわらずタイプとしては存在すると主張することには、意味がないと思われるからです。日本語の音節の連なりのなかには、すでに語として使われているものもあれば、語として使われていないものもあります。そして、後者のなかにはトークンが存在しないものもありえます。しかし、そうした音節の連なりは、可能な語タイプであるにすぎず、「存在しない語」とされるほかはありません。

トークンはすべて具体的な事物ですから、その存在は偶然的なものです。よって、その存在がトークンの存在に依存する、語のような単純なタイプは、偶然的に存在する抽象的对象です。この結論は一見不思議にみえるでしょう。しかし、つぎのように考えればそれほど奇妙でもありません。現在の日本語の語彙に属する語のひとつひとつについて、それが語としてあるということは偶然でしかありません。次節で扱うような、言語的タイプ以外のタイプの存在者を考えれば、タイプの存在が偶然的であることは、さらに明らかです。

たとえば、「東京物語」や「ジュピター」が偶然的にしか存在しないことに異論はないでしょう。

だが、他方で、タイプは、トークンと違って、時間のなかに存在するものではないのですから、ある時から存在し始めたり、ある時に存在しなくなるというものはありえないはずで、それにもかかわらず、わたしたちは、ある語がまったく使われなくなったときには、その語はタイプとしても存在しなくなったと考えたくなりますし、「東京物語」のトークンであるフィルムやDVDや脚本などすべてがなくなるときには、「東京物語」という映画そのものもまたなくなると考えたくなります。

たしかに、こう考えることは自然だとみえます。しかしながら、その「自然さ」は、われわれの存在概念がどうしようもなく時間の中の存在に向けられていることから来るものです。「まだ存在しない」「いま存在する」「もう存在しない」といった時制を伴った存在述語と比較すれば、無時制の存在述語は常に不自然にひびきます。とりわけ、タイプの存在者は、その存在が、時空的存在者であるトークンの存在に依存するゆえに、時制を伴う存在述語の適用を受けるものと考えられてしまいます。しかし、非時空的存在者であるタイプは、本来、そうした述語の適用を受け付けられないはずで、

ここで役に立つのは、実在か非実在かという区別です。この区別は、時間的存在者と非時間的存在者の両方に同様に適用できるからです。「実在のものである」という述語は、時制を伴わない存在述語として用いることができます。もちろん、トークンは時間的存在者ですから、それが実在のトークンであるということは、時制をもつ存在述語である「あった」「ある」「あるだろう」のいずれかがそれに適用されるということです。しかし、タイプは非時間的存在者ですから、その実在性は、こうした時制的存在述語の適用と同一視することはできません。

さて、タイプとしての語や映画が実在の語や映画であるのはどのような場合でしょうか。それは、そうした語や映画のトークンが存在する場合、すなわち、そうしたトークンに、時制をもつ存在述語のいずれかが適用されるときです。そのトークンが将来存在する場合は、タイプの実在性をわたしたちが前もって確実に知ることは、多くの場合不可能です。だが、それは、認識上の問題にすぎません。はっきりしているのは、そのトークンがいま存在しないとしても、過去あるいは未来のいつかにトークンが存在する限り、タイプは実在のものであるということです。「東京物語」のすべてのトークンが失われても、そのことによって「東京物語」が非実在の映画となることはなく、ある語がいったい痕跡を残すことなく使われなくなったとしても、そして、それゆえ、その存在を知るすが現在のわたしたちにはなくとも、その語が非実在の語となることはありません。

以上のような考察によって、語のような単純なタイプが、偶然的に存在する抽象的対象であるという、一見奇妙な結論は擁護できると思われま

たがって、つぎに考察すべきなのは、句や文のような複雑なタイプの存在が何に存するかです。

複雑なタイプの存在が何に存するかという問いへの、もっとも素直な答えは、単純なタイプの場合とまったく同じく、そのトークンが存在することとするものと思われるでしょう。文法的には許されているが、あまりに長大であったり、あるいは、単にたまたまといった理由で、宇宙の全歴史を通じて誰によっても発せられることのない句や文は、存在せず、ただ可能的にのみ存在するとすることです。これはこれで申し分のない帰結のようにみえます。しかし、ここには、ひとつ問題があります。

語が偶然的存在であるということを思い出しましょう。よって、可能ではあるが実在しない語があります。日本語の一部になれたかもしれないのに、決してそうなる運命にはならない語といったものは容易に想像できます。たとえば、「あごやか」という表現は、日本語の音節としては存在しますが、語としては存在しません。いま仮にこれが日本語の一部になることは今後もないと想定しましょう。しかし、この表現は、現実にはそうなることは決してなくとも、日本語の語、たとえば、形容動詞でありえます。つまり、この表現は、可能的にのみ存在するタイプの存在者です。さらに、この可能的に存在する語を用いて「あごやかに笑った」とか「花子はあごやかに笑った」といった句や文を作れば、それは可能的な句や文です。こうした可能的な表現と、文法的には可能でありながらトークンをもたないという意味での句や文とを比較するとき、後者の方が、いわば「より現実的な」存在であるように思えないでしょうか。その理由は、後者の可能性が、現実に存在する言語のなかに含まれているのに対して、前者はそうではないということに求められるでしょう。

こうした区別を尊重するひとつのやり方は、句や文のような複雑なタイプは、その構成が言語の文法によって保証されている限り、単に可能的にではなく、現実に存在する、つまり、実在すると考えることです。より具体的にはつぎのように考えます。

複雑な言語的タイプ α は存在する $\Leftrightarrow \alpha$ の構成要素である単純な言語タイプのすべてが存在する。

ただし、ここで「単純なタイプ」の中には、語だけでなく、語と語を連結する操作のようなものも含めて考えます。こうした操作についても、その存在はそのトークンが存在することと同じです。単純なタイプが存在するためには、そのトークンが存在することが必要にして十分ですから、つぎが成り立ちます。

複雑な言語的タイプ α は存在する $\Leftrightarrow \alpha$ の構成要素である単純な言語タイプはすべてトークンをもつ。

句や文のような複雑な言語タイプは、必ずしもトークンをもたなくとも存在すると考えることは、言語的な事柄について一般的なことを述べようとするときの、わたしたちの語り方と合致します。「日本語では、二つの名詞句を「の」で結合することで新しい名詞句を作ることができる」といった一般化を考えましょう。この一般化については、次の二つのことが言えます。まず第一に、この一般化があてはまる名詞句の範囲は、たまたまトークンをもつ名詞句だけに限られるとは誰も考えません。第二に、この一般化があてはまる名詞句の範囲は、単に可能な名詞句、すなわち、現実の日本語には属さない語を含む名詞句までをも含むとも考えられてはいません。つまり、タイプへの一般化が行われる量化の範囲にあるものは、現実の語から構成される表現のすべてであり、そのトークンが存在するかどうかとは無関係です。量化の範囲にあることと存在することとの緊密な関係を思い出せば、これは、わたしたちが、複雑なタイプの存在の条件としてトークンの存在を要求しないということを意味します。

以上のことをまとめると、言語タイプのあり方にはつぎの三通りがあることとなります。

- (a) トークンをもつタイプとして存在する。
- (b) トークンをもたないタイプとして存在する。
- (c) 可能なタイプとして可能的に存在する。

語のような単純タイプはすべて (a) に属します。句や文のような複雑なタイプは、(a) もしくは (b) に属します。(c) に属するのは、現実にはない語や、そうした語を含む句や文です。先に論じたように (a) は偶然的に存在する抽象的対象です。どのような複雑なタイプが存在するかは、どのような単純なタイプが存在するかに依存し、後者は、そのトークンの存在に依存しますから、(b) もまた、偶然的に存在する抽象的対象です。最後に、(c) は、偶然的に存在しない抽象的対象です。

4 タイプ的存在者の諸相

タイプとトークンの区別は言語表現に限られるわけではありません。いろいろな場面でこの区別にわたしたちはしょっちゅう出会っていると言っても言いすぎではありません。第一に、わたしたちが消費する商品にはすべてタイプとトークンの区別があります。たとえば、「私とかれは同じ車に乗っている」と言うことは多義的です。それは、私とかれとが一台の車に同乗していることを意味することもできれば、私とかれとは同じ車種の車を使っていることを意味することもできます。前者がトークン、後者がタイプにかかわります。「あの二人は同じ服を着ている」や「二人の男が同じ料理を注文した」

といった場合は、トークンとしての解釈はずっとむずかしくなります。現在の
のような消費社会においては、商品は、同一の規格に基づいて大量に生産さ
れます。タイプが規格にあたり、その規格に基づいて生産され市場に送り出
される個々の商品がトークンにあたります。

自然種についてもタイプとトークンの区別を考えることができます。「華南
虎は絶滅寸前である」で「華南虎」はタイプを指しますが、「華南虎は隣の檻
にいる」ではトークンを指します。自然種の場合も、同一の「規格」をもつ
個体が複数存在します。そして、「規格」と個体の両方が同じ名前と呼ばれる
のです⁵。

さらに、芸術のさまざまな分野においても、タイプとトークンの区別は重
要な役割を果たします。さまざまな時と所でさまざまなひとによって歌われ
ても、同じ歌であったり、さまざまな形で、また、ときには、たがいに相異なる
言語で出版されていても、同じ小説でありうることを、わたしたちはよく
知っています。演奏についてではなく、演奏された曲について話すとき、ま
た、自分の蔵書の一部についてではなく、ある有名な小説について話すとき、
わたしたちはタイプの存在者について話しているのです。

タイプとトークンの区別が必要となる事例を数え上げてみると、そこには
三種類のものがあることに気付かされます。ひとつは、商品や自然種のように
同一の規格に従う個体が複数存在する場合です。もうひとつは、言語のよ
うな体系的性格をもち、その要素のなかに単純なものと複雑なものの区別が
あるものです。そして、最後に、そうした体系に依存して存在可能となる小
説や楽曲のようなものがあります。

楽曲や小説は芸術作品ですが、芸術作品全般にタイプとトークンの区別が
一様な仕方ではあてはまるわけではありません。絵画や彫刻に関して、この区
別は適用されません。こうしたジャンルにおいては、オリジナルは唯一絶対
的なものであり、どんなに巧妙に作られた複製であっても、それは別物です。
二枚の絵、二体の彫刻がどれだけたがいに見分けがつかないほどそっくりで
あったとしても、そこにあるのは、二枚の異なる絵、二体の異なる彫刻でし
かないのです。

他方、タイプとトークンの区別は明らかに適用可能ですが、楽曲や小説の
あり方よりはむしろ、商品のあり方と類似したあり方をもつ芸術作品も存在
します。もっともわかりやすい例は、版画でしょう。版画はまさに同一の規
格に基づいて複数のものが作られる例だからです。写真も同様です。さらに
映画もまた、この部類に入れてよいでしょう。ただし、映画は、鑑賞される
ためには上映されなければなりません。ここから、何が映画のトークンであ

⁵ このことは、自然種名と商品名とのあいだに多くの類似点があることを示唆します。自然種
名がタイプとしての自然種を指す名前として導入されるように、商品名はタイプとしての商品を
指す名前として言語に導入されます。一九七〇年代にパトナムおよびクリプキによって指摘され
た自然種名のもつ意味論的特性は、ほとんどそのまま商品名にも備わっていると考えてよいと思
われますが、この点について論じることは別の機会に譲りましょう。

るかに関して、少なくとも二つの立場がありうることとなります。ひとつは、上映された映画だけを映画のトークンとみなす立場です。この立場に従えば、「東京物語」の個々のトークンは、その特定の上映という出来事 (event) に限られるということになります。「東京物語」のトークンは、タイプの同一の出来事が繰り返し再現されるという形で複数存在することになります。これに対して、もうひとつの立場では、「東京物語」のトークンは、その特定の上映だけには限られません。それは、フィルム、あるいは、テープやディスクといった何らかのメディアといった物理的対象としても存在すると考えられます。この立場からは、「東京物語」のトークンには、存在論的に異なる二種類のもの包摂されます。すなわち、出来事と物理的対象です。

最後に、楽曲と小説の例にもどりましょう。音楽作品の多くは、詩や小説のような言語的作品と同様、楽音組織という「音楽言語」に依存して作られます。宮沢賢治の詩「雨ニモ負ケズ」の特定のトークンの存在が、日本語の一連の語のトークンが存在することによって成立する事態であるのと同様、バッハの「半音階的幻想曲とフーガ」の特定のトークンの存在は、西洋近代音楽に特有の音組織を構成する音のトークンが一定時間のなかに適切な仕方分布することによって成立します⁶。つまり、文学作品や音楽作品はタイプの存在者ですが、特定の言語や楽音組織といった、別のタイプの存在者から成る体系を前提とするものであり、そうした体系に属するタイプの存在者、つまり、語や楽音、を素材としているのです。

別のより基底的なタイプの存在者に依存するということは、そこに還元されるということの意味しません。たとえば、文学作品はそれが書かれた言語のもつ内在的性質だけで説明できると考える者はいません。つまり、夏目漱石の『明暗』について述べることは、大正時代の日本語の語彙と文法から導き出されることに尽きるなどは、だれも考えないでしょう。しかしながら、特定の文学作品や音楽作品のあり方が解明されるためには、それが依存する言語や楽音組織といったタイプの存在者のあり方が先に探究されなければならないことも正しいでしょう。それゆえ、タイプの存在者についての存在論的探究においてこの種の存在者は後回しにされてもよいと思われます。そうすると、二種類のタイプの存在者が残ります。すなわち、商品や自然種に代表されるものと、言語に代表されるものです。

ところで、この二種類のタイプの存在者を比較するとき、そうした存在者が要請される必要性の程度には、はっきりとした差があるように思われます。そのことを示唆しているのは、商品に代表される種類に属するトークンである対象については、それがどのタイプのトークンであるかを知らなくとも、対象として再認できることです。私の家の前にいつも駐車している車がどの

⁶ 詩や楽曲のトークンに関して、映画に関して述べたのと同様の考慮があてはまります。朗読（あるいは黙読）や演奏といった出来事だけが、詩や楽曲のトークンであるか、それとも、本や楽譜やレコードといった物理的対象もまた、そのトークンでありうるかという問題です。

ような車種の車であるかを私は知りません。しかし、それが自動車であることを私は知っていますし、毎日私が見かけるのが同一の自動車であるかどうかを判断することさえできます⁷。

しかしながら、言語的なトークンについて同様のことは成り立ちません。いちばん単純な例として、文字を考えましょう。その国の文字をまったく知らない国に旅行した場合でも、看板や本や雑誌といったものを難なく認めることができる以上、その国の文字がどのような形のものであるかについて一定の観念をもつことは、それほどむずかしくはないでしょう。だが、そうした文字の連なりをいくらたくさん見せられたとしても、その国の文字が何であるかを、タイプとして教わらなければ、何かが文字の連なりであるとは認識できても、それが、いくつの文字トークンからできているのか、ひとつの文字トークンがどこから始まり、どこで終わるかを知ることはいかなるでしょう。多様なレタリングや、続けて書かれるときのさまざまな崩し方にもかかわらず、同じ文字としてひとが認識できるのは、タイプとしての文字の観念をもっているからこそです。

だが、タイプとしての文字は、一定の時と所に存在する具体的対象である文字トークンとはちがって、時空的位置をもたない抽象的对象です。したがって、文字タイプについての知識が、文字トークンの識別のために必要だとすることは、きわめて逆説的な事態を招くようにみえます。見知らぬ国の文字をわれわれが、そうした文字に出会う前から知っていたはずはありません。わたしたちが出会うものはすべて具体的対象に限られるのですから、わたしたちにとって文字と出会うということは、文字トークンに出会うということ以外にはありえません。文字トークンしかもたないわたしたちに、どうして抽象的对象である文字タイプが知られるようになるのでしょうか。問題はもっと深刻です。文字トークンを個々の文字トークンとして識別できるためには、文字タイプの知識が必要だとするのなら、わたしたちはそもそも文字トークンについての知識をもつことができるのでしょうか。

このことは、文字に限らず、言語的なもの一般にあてはまります。一方で、わたしたちが手がかりにできるのは、具体的なトークンだけであるのに、抽象的なタイプについての知識をわたしたちがもつことは、どうやって可能になるのでしょうか。他方で、トークンについての知識はタイプについての知識を前提としてのみ成立するのなら、そもそもトークンについての知識は、どうやって可能になるのでしょうか。

⁷ 同様のことは自然種に関するとも言えます。私の家の庭に毎日来る鳥が同一の鳥であるのかを知るためには、それがどのような種類の鳥であるかをつきとめる必要はありません。

5 タイプとトークンの認識論

わたしたちがいま直面しているジレンマは、(i) タイプはトークンを通じてしか与えられないにもかかわらず、(ii) タイプの観念なしでは個々のトークンは認識されない、というものです。このジレンマは、これまで言語をまったくもたない幼児が母語を習得する場合にも、また、言語学者が未知の言語を研究する場合にも等しくあてはまります。

トークンを通じてタイプが知られるのはどのようにしてかが問われるとき、すぐに出て来る考え方は、さまざまなトークンのなかからたがいに類似するトークンが集められ、ついで、それらに共通する特徴としてタイプが抽象されるといったものでしょう。しかし、上の(ii)、すなわち、タイプの観念なしでトークンの認識はないことは、こうした考え方の無力さを明らかにします。トークン間の類似性からタイプを抽象することが不可能な企てであることを知るには、じつにさまざまなデザインが同じひとつの文字のそれであることを思い出すだけで十分です。「あ」という文字のトークンすべてに共通する特徴として挙げられるものは唯一、それらがすべて文字タイプ「あ」のトークンであるということだけでしかないとまで言えます⁸。

「しかし」とジレンマのもう一方の角、すなわち(i)は問いかけます—文字タイプ「あ」の観念はどうやって獲得されたのか、と。「あ」のトークンを一度も見たことがないひとが、タイプ「あ」の観念をもつことはありえません。数のような数学的対象ならばともかく、タイプ「あ」がアプリアリに知られていると考えることはばかげています。そうすると、われわれは、トークンとの出会いという経験を通じて、タイプという抽象的対象の知識をアプリアリな仕方でもつと考えざるをえません。だが、「抽象的対象についての経験的知識」というこの考えは、法外なものと映る⁹だけでなく、そもそもトークンとの出会いが可能となるためにはすでにタイプの知識が獲得されていなければならないという、ジレンマのもう一つの角に突き刺される結果に終わります。

ここで少し目先を変えて、物体の知覚について考えてみましょう。物体に関して感覚を通じてわたしたちに与えられるものは常に、ある時点におけるそのいわば表面でしかありません。視覚の場合は言うまでもなく、視覚に次いで物体の知覚にとって重要である触覚の場合も、その都度与えられるものは、物体の全体でなくその一部についてのものだという意味で、物体の「表面」です。しかし、わたしたちは、時間的空間的両方の意味での物体の表面

⁸ Cf. [5].

⁹ タイプの知識がトークンを通じてしか得られないという事実が、こうした哲学的問題を引き起こすことは、[1]で指摘されています。ただし、同様の問題提起はすでに[4]でなされています。とりわけ、つぎの箇所が注目されるべきです。「タイプの非時間性についての問題は、実際には認識論的なものである。つまり、トークンについてのある種の知覚によって、そのタイプの任意のトークンに妥当するような、タイプについての真理をわれわれが知ることはどうしてできるかという問題である」(p.160、邦訳××頁)。

が与えられることを通じて、時間的に持続し、三次元の拡がりをもつ物体を知覚します。物体は、その表面についての感覚的知覚を超えたものですが、そうした表面的知覚なしに物体の知覚が成立しないこともたしかです。でも、他方で、物体の観念なしで、表面の知覚が可能であるとも思えません。たがいに類似する表面的知覚を多数集めてきて、そこから物体を構成しようとすることは、パートランド・ラッセルの『外部世界はいかにして知られるか』(1914年)から、ルドルフ・カルナップの『世界の論理的構築』(1928年)を経て、ネルソン・グッドマンの『現象の構造』(1951年)に至るまで、二十世紀前半の哲学の中でしばしば試みられてきました。そして、そうした試みはすべて失敗に終わるとというのが、現在の哲学では支配的な考えです。つまり、表面の知覚なしには物体の知覚はありえないが、表面の知覚だけから物体の観念に到達することはできないということは、広く認められています。

つまり、物体の知覚の場合でも、言語的タイプとトークンの認識の場合と同様のジレンマがあるということです。一方で (i) 物体はその表面の知覚を通じてしか与えられないにもかかわらず、他方で (ii) 物体の観念なしには表面の知覚はありえないというわけです。こちらのジレンマがどう解決されるかを手がかりにしながら、わたしたちのジレンマを解決することを試みてみましょう。

まず、現実のところわたしたちは、物体を知覚する際に直接与えられているものがその「表面」にすぎないということ意識してはいないことに注意しましょう。わたしたちは、持続的に存在する三次元の物体を知覚していると考えています。大森荘蔵 ([3]) の卓抜な言い方を借りれば、物体の「見え」には常に、直接知覚されていない部分の「思い」がこめられています。言語表現の知覚の場合も、これと同様のことが生じていないでしょうか。つまり、わたしたちが、言葉を耳にしたり目にしたりするとき、わたしたちは、与えられているものが物理的な出来事や対象といったトークンであることをことさらに意識してはいません。わたしたちは、別の時や別の場所で繰り返し言われたり書かれたりできる、タイプとしての言葉を聞いたり見たりしていると考えています。このことは、言語音や字体ではなく、単なる物理的音声や模様が、努力なしには意識されないことから証拠立てられます。また、同じ言葉を何度も何度も言ったり書いたりするとき、言葉がその「形」を失って、単なる音や模様を感じられるということも、試してみればわかることです。それは、言葉の「形」を支えているタイプの観念が脱落することによって生じる現象であるといえます。

それゆえ、言語表現に関してわたしたちが知覚するのは、トークンであるというよりは、タイプであると言うべきです。それは、わたしたちが物体の表面ではなく、持続的に存在する三次元の物体を知覚することと同様です。物体の知覚に、持続的に存在する三次元のものという理解が含まれているのと同様、言語表現の知覚には、異なる時と所で別の事例 (instance) をもちう

るタイプのなものという理解が含まれています。大森の言い方をふたたび借りれば、トークンの知覚にはタイプの「思い」がこめられているのです。

さて、このように考えることによって、はたしてわたしたちのジレンマは解消されるでしょうか。まず、タイプはトークンを通じてしか与えられないが、後者のような具体的なものから前者のような抽象的なものについての知識を得ることが、どうしてできるのかという点から考えましょう。

この疑問への端的な答えは、言語表現の知覚においてわたしたちが知覚するのは抽象的对象そのものだということです。物体の知覚においてわたしたちが知覚するのが、その表面ではなく、物体そのものであるように、言語表現の知覚においてわたしたちが知覚するのは、物理的な出来事や物体としてのトークンではなく、抽象的对象であるタイプとしての言語表現です。ただし、この抽象的对象は二重の意味で、具体的な存在であるそのトークンに依存しています。第一に、言語タイプは、それが知覚されるその都度、そこで生じているトークンそのものであったり、それによって引き起こされる、聴覚的や視覚的な出来事に依存して知覚されます。そして、より一般的に、言語的タイプはそのトークンの存在に依存して偶然的存在する存在者です。この第二の点は、抽象的对象についてのア・ポステリオリで経験的な知識というものが、偶然的存在する抽象的对象という言語タイプの存在様式の、認識論における反映であることを明らかにしています。

しかし、トークンを耳にしたり目にしたりするとき、わたしたちが知覚するのがタイプであるとすれば、わたしたちが新しい言語表現を知ることができたり、そもそも言語を習得できるということが、まったく不可解なことにならないでしょうか。というのは、これが正しければ、トークンが与えられなければタイプも与えられないはずなのに、トークンの認識のためにはそれに先立ってタイプの認識がなければならないように思われるからです。つまり、わたしたちが直面しているのは、ジレンマのもうひとつの角です。

ここでも、物体の知覚について考えることが役に立ちます。ここでも同様のジレンマがありました。一方で、直接与えられているのは、空間的・時間的両方の意味での、物体の表面でしかないにもかかわらず、他方で、知覚されているのは、奥行きもあれば中味もある物体そのものです。だが他方で、物体の表面が表面として与えられるためには、物体の観念がなくは不可能です。つまり、表面が与えられなければ物体も与えられないはずなのに、表面の認識のためにはそれに先立って物体の認識がなければならないように思われるのです。

わたしたちがひとつの物体を知覚するのに成功するのは、さまざまな表面の知覚をひとつの特定の物体の知覚として組織化することに成功することによってです。こうしたことができるためには、わたしたちは、物体一般の観念と、わたしたちがもつさまざまな表面の知覚から特定の物体を決定する方法との両方をもっていなければなりません。

言語表現の場合も同様です。わたしたちは、言語的タイプ一般の観念と、わたしたちに与えられるさまざまなトークンからそれらがそのトークンである特定のタイプを決定する方法との両方をもっていなければならないのです。物体の知覚が「これがその表面である物体がここにある」というかたちのものであるのと同じように、言語的タイプの知覚は「これがそのトークンであるタイプがここにある」というかたちのものです。このどちらの場合でも、わたしたちに必要なのは、表面をもつ物体、あるいは、トークンをもつタイプといった一般の観念と、特定の物体もしくは言語的タイプを、表面やトークンの知覚から出発して、それと認めるための方法です。

そうすると最初の問題は、物体の観念はどのようにして獲得されるのか、また、タイプの観念はどのようにして獲得されるのかです。物体の知覚の場合、少なくとも三通りの答え方があると思われます。それらは、次のものです。

- (a) 物体の観念は、物体の表面についてのわたしたちの経験から帰納によって得られる。
- (b) 物体の観念は、理論的存在者として要請される。
- (c) 物体の観念は、わたしたちの認識様式の一部である。

そして、これとまったく平行に、言語表現の知覚の場合にも、つぎの三通りの答え方があります。

- (a) タイプの観念は、トークンについてのわたしたちの経験から帰納によって得られる。
- (b) タイプの観念は、理論的存在者として要請される。
- (c) タイプの観念は、わたしたちの認識様式の一部である。

以下、この三つの可能性を順番に検討していきましょう。

(a) に望みがないことは、すでに述べた通りです。表面の知覚がもつ性質や相互的關係によるだけでは、同一の物体に属する表面という概念の外延を決定できないのと同様、トークンの性質や相互的關係によるだけでは、同一のタイプの事例であるトークンという概念の外延を決定することはできません。ゆえに、表面の知覚やトークンの知覚をどれだけ集めたとしても、そこから物体やタイプの観念を得ることはできないのです。

それに対して、(b) は一見したところ、もっともな考えのようにみえます。言語的タイプの典型である語を取り上げましょう。与えられた言語において、何がひとつの語であるかは、かなりの部分、理論に左右されます。この問題は、一連の表現をどう分節化するかにかかわり、どのような分節化が正しいと考えるかは、異なる文法理論に応じてさまざまでありうるからです。極端なことを言えば、何がひとつの文であるかということさえ、理論によって異なります。そうすると、語や文といった言語的タイプは、文法という理論

によって措定される理論的存在者であるとみなすべきであるという結論が得られそうです。

たしかに、文法理論に依存して決まる語や文の観念があることは疑いありません。しかしながら、それは、言語的タイプが一般に理論的存在者であることを含意するでしょうか。こうした含意が正しいならば、言語表現においてわたしたちが知覚するのはタイプそのものであるとした先の主張は、きわめて怪しくなります。理論的存在者のどのような特徴づけも、それがわたしたちの知覚の対象にならないという点では、一致するでしょう。よって、言語的タイプが理論的存在者であるのならば、それはわたしたちの知覚の対象であることはできません。

ここでも、物体の知覚にもどって考えてみるのが助けになります。物体を理論的存在とみなすことにわたしたちがためらう理由は、もしそうするならば、わたしたちが知覚しているのは物体ではないということになるからです。しかし、物体が理論的存在者ではないと考えることと、物体のより正確な観念を得るためには理論に頼らなければならないと考えることは矛盾しません。物的な知覚は常に、複数の物体からなる光景の分節化された知覚です。でも、どこからひとつの物体が始まり、どこでそれが終わるのかとか、知覚されている光景のなかにいくつの物体が存在するのかといったことを、体系的な仕方では答えようとするならば、わたしたちは理論に頼らざるをえません。

まったく同様のことが、言語的知覚においても成り立つと私は主張します。わたしたちがことばを耳にしたり目にしたりするとき、その知覚は常に、分節化されたものです。物的知覚において物体に分節化されていない光景の知覚がありえないように、一方で音や字、他方で語や句に分節化されていない言語的知覚などありえません。しかし、その分節化をわたしたちが実際にどう行っているか、また、そこにどのような体系性や一貫性が見出されるかを反省することは、現場の知覚ではなく、理論の領分に属することです。つまり、語や文といったカテゴリーが理論的にのみ確定されることと、言語的タイプが知覚の対象であって理論的存在でないこととは、たがいに矛盾することではないのです。

こうしてわたしたちの考察は、(c) を、タイプの観念の源としてもっとも有望な選択肢として差し出すことになります。つまり、タイプ、とくに言語タイプの観念は、わたしたちの認識において、物体の観念と同じだけ、基本的なものであると考えるのです。それは、わたしたちとの位置に応じて異なる仕方で見られる物体の観念が、わたしたちの認識様式の一部であるのと同様に、さまざまなトークンにその事例として現れるタイプの観念もまた、わたしたちの認識様式の一部であると考えたことであり、タイプの知覚においてトークンは、物体の知覚におけるパースペクティブと同様の役割を果たすと考えることです。

もうひとつ問題が残っています。それは、わたしたちの手元にあるものは

さまざまな音や形の知覚と言語的タイプの一般的観念でしかないにもかかわらず、そこからある特定の言語的タイプをそれとして認識できるようになるのは、どうしてかという問題です。物体の知覚の場合の同じ問題は、必ずしも同一の物体の表面だけとは限らないさまざまな表面的知覚と物体一般の観念から、特定の物体をそれとして認識できるようになるのは、どうしてかというものです。このどちらの場合でも、問題を解く鍵は、わたしたちの知覚とは単に受動的なものではなく、わたしたち自身の意志に基づく活動だという事実にあると思われま

す。物体の知覚の場合、わたしたちに直接与えられているのは、さまざまな物体の表面から成る全体です。物体の観念をもっているわたしたちは、これらの表面の知覚が同時に、物体の知覚でもあることを知っています。しかし、最初わたしたちはまだ、同一の物体の表面のさまざまな知覚をひとつのクラスにまとめることができないかもしれません。自身の身体を用いて自分のまわりを探索することによってはじめて、それが可能となります。つまり、視線を向け変えたり、これまで見えていなかった部分を見るために歩き回ったり、物体の表面に触ってみたりといった事柄です。わたしたちは、自身の身体やその部分を意図的に動かすことによって、新たな表面的知覚を手に入れ、そうした知覚を単一の物体の知覚へと統合しようと試みるのです。

わたしたちの行為なしに言語的タイプの知覚がありえないことは、物体の知覚の場合より以上に明白ではないでしょうか。言語的トークンを生み出そうとわたしたち自身が試みるのでなければ、タイプの認識は望めません。わたしたちは、ある特定のタイプのトークンを生み出そうという意図のもとに、トークンを生み出すのです。

だれか先生について新しい言葉を学ぶ場合を考えてください。先生は、その言語の語のトークンとして、一連の発声を行います。わたしたちは、先生の出した音を真似ようとはしますが、それは、その同じ語の別のトークンを生み出そうという意図のもとです。その場合の目標は、先生が出した音にできるだけ近い音を出そうというよりは、先生が発した語と同じ語のトークンとして先生にわかってもらえるような音を出そうということです。発した音が意図された語のトークンとして認めてもらえなければ、わたしたちは、そのタイプのトークンとして認めてもらえるまで、いろいろと努力するでしょう。こうしたことすべてにおいてタイプの概念が本質的なものであることは明らかです。

先生なしで新しい言語をわたしたちが学ぶときも事情はたいして変わりません。このときでさえ、わたしたちは自分だけで言語を学べるわけではありません。自身の発声や発言がその言語に属するものと認めてもらったり、訂正してもらったりするためにも、すでにその言語を話している人々との交流は不可欠です。言語を学ぶ際には他人からのインプットが必要であるというこの事実は、言語の使用が他人へと向けられた行為であることを示している

ように思われます¹⁰。

6 言語の同一性

これまで論じてきたように、言語はタイプの存在者から成る体系です。そこには、単純なタイプと複雑なタイプの両方があります。単純なタイプのなかには、他のタイプに作用して別のタイプを構成するはたらきをもつものと、そうしたはたらきをもたないものがあります。前者の全体を C 、後者の全体を V で表し、これらの単純タイプから構成される複雑タイプの全体を $C(V)$ で表しましょう。しかし、これが言語そのものであるわけではありません。言語は、単なる統語的構造に尽きるものではなく、意味もまたその不可欠の要素だからです。したがって、 $C(V)$ の要素に対して、その意味を関係づける関係 M というものを考えましょう。 $C(V)$ の要素のなかには、それ単独では意味をもつとはみなされないものもあるかもしれませんので、 M は $C(V)$ の要素すべてに、その意味を関係づける必要はありません。また、 M が（部分）関数ではなく関係とされているのは、 $C(V)$ の要素のなかには複数の意味をもつものもありうるからです。ひとつの $C(V)$ に対して、 M と M' という二つの異なる意味関係を考えることができます。この場合には、二つの異なる言語があると考えべきです。よって、言語は一般に、

$$\langle C(V), M \rangle$$

という具合に、タイプの体系と、意味関係という二つの要素によって表されると考えます。

言語のこうした特徴づけは、未だごく粗雑なものにすぎません。とりわけ、言語のもつ意味的側面を意味関係 M によって表せるという想定は、疑いなく非現実的です。しかしながら、そうした問題とは別に、この特徴づけは、より原理的な困難にさらされているようにみえます。それは、言語を規定するとされる二つの要素がいずれも抽象的対象であることから来ます。抽象的対象は時間の中にあるものではありません。したがって、それについて変化を語るは無意味です。しかし、このことは、言語が変化する、それどころか、常に変化しているという事実明らかに背反します。

あるいは、このような仕方の特徴づけられるのは、論理学のための言語のように、人工的に作られた言語だけであって、日本語や英語のような自然言語を同様に扱うことは、もともと無理な相談なのだとされるかもしれません。しかしながら、日本語や英語がタイプの存在者から成ることは、人工言語の場合と何ら変わりありません。タイプの存在者が抽象的対象である以上、

¹⁰ この主題について言われるべきことは他にもたくさんあります。知覚心理学と自然言語処理という二つの分野における関連する研究への言及はぜひとも必要なところでしょう、それについては他日を期したいと考えています。

それから成る体系もまた抽象的対象であるほかはありません。そして、抽象的対象である以上、自然言語もまた変化を受け付けられないはずで、どうしてわたしたちは、日本語や英語の変化について語ることに、何の困難も感じないのでしょうか。

この問題は、言語についての現在のわれわれの語り方が、二つの点でミスリーディングであることによって引き起こされたものだと思います。まず第一点は、言語の「変化」とは、言語そのものが変化することではなく—それは不可能です—、言語の交代にほかならないということです。第二点は、「日本語」や「英語」といった名称は、単一の言語を指す単称名ではなく、多数のたがいに異なる言語を指す一般名であるということです。この二つの点さえ十分に認識されれば、言語が抽象的対象であることと、言語の「変化」という現象とのあいだには何ら矛盾がないことが明らかになるはずで、

色の場合と比較するのがわかりやすいかもしれません。言語の変化は色の変化と同様です。色の変化と言いますが、色そのものが変化するわけではありません。それは、対象が異なる色をもつようになることです。これと同様に、言語の変化とは、ひとが異なる言語を使うようになることにあります。色の変化の中には、赤から緑に突然変化するようなものもあれば、同じ赤のなかで色合いが変化するようなものもあります。同様に、言語の変化にも二種類のものがあります。第一の種類の変化は、日本語を使っていたひとが、あるときから英語しか使わなくなるようなものです。これに対して、第二の種類の変化は、同じ日本語のなかで、以前とは異なる日本語を使うようになるものです。ふつう「言語の変化」と言われるときに念頭におかれているのは、この第二の種類の変化の方です。赤の色合いの変化が、同じ赤のなかでちがう色になることであるのと同様に、日本語の変化とは、同じ日本語のなかでちがう言語になることなのです。

ここでわれわれはまた再び、「同じ」という言葉とそれが表す概念が引き起こしやすい混乱に注意する必要があります。「同じ」という言葉の基本的な意味は、同じ一つのものであるということにあります。したがって、この意味での「同じ」は「同一の」と言い換えられます。これまで議論してきたのはすべて、基本的な意味での「同じ」、つまり同一性としての「同じ」の方です。言語表現がタイプとして同じなのか、それともトークンとしても同じなのかの問題になったとき、「同じ」はどちらの場合でも同一性の意味でした。そこで問題となったのは、何が同一とされるのか、それはタイプなのかトークンなのかということであって、「同じ」の相異なる意味ではありません¹¹。

だが、同一の—つまり、「同じ」の基本的な意味で同じである—種類に属す

¹¹ ただし、実際のところ問題はそれほど単純ではありません。というのは、存在者としてのタイプを認めようとする哲学者は、タイプが同じであるということ、タイプの同一性として解釈せず、同一の種類に属することとして解釈したがるからです。こうした解釈のもとでは、同じトークンであるかどうかは同一性の問題ですが、同じタイプであるかどうかは同一性の問題ではないこととなります。すでに本文から明らかであるように、この解釈はここでとるものではありません。

るものどうしもまた「同じ」と言われます。

- (1) 小泉八雲とラフカディオ・ハーンとは同じ人物である。
- (2) ぼくもきみも同じ人間だ。

(1) に現れる「同じ」と(2)の「同じ」が同じ—同一の—意味でないことは明瞭でしょう。論理学の言葉を使って(1)と(2)をつぎのように書き換えてみれば、この違いはもっとはっきりします。

- (1') 小泉八雲 = ラフカディオ・ハーン
- (2') ぼくは人間だ ∧ きみは人間だ

論理学で同一性を表す記号「=」が現れているのは(1)のみであって、(2)には現れていないことが気付かれるでしょう。「同じ」は、どちらの意味でも、多くの場合、種類を表す名詞を修飾する形で用いられます。したがって、「*K*」をそうした名詞とすると、「同じ *K*」という表現は、それ単独では多義的となります¹²。

たとえば、一見矛盾としか思えない

- (3) みな同じ人間だが、それぞれちがう人間だ。

も、ここでの「同じ」は同一の種類に属するという意味、「ちがう」は同一性の否定であると解釈すれば、問題なく意味の通じる文となります。これとまったく同様なのが、つぎです。

- (4) みな同じ日本語を話すが、それぞれちがう日本語だ。

そして、言語の歴史のおよび地理的「変化」は、(4)によって表現されるような事象に基づいています。異なる時点で話される日本語は、どちらも日本語ではあるが、ちがう日本語であり、同様に、異なる場所で話される日本語もまた、たがいにちがう日本語でありえます。

こうした言い方が意味をもつということは、「日本語」という表現が、単一の対象を指す単称名ではなく、複数の対象についてあてはまる一般名であることを示唆しています¹³。意味関係を伴うタイプの存在者の体系として言語を特徴づけるとき、言語の名前として通用しているものは、複数の言語にあてはまる一般名とならざるをえません。それは、「日本語」や「英語」のような自然言語の名称の場合だけでなく、「エスペラント」のような非形式的な

¹² 興味深いことに、「異なる *K*」や「ちがう *K*」に同様の多義性はありません。

シェイクスピアとベーコンとはちがう人間だ。

は、シェイクスピアとベーコンの同一性を否定する意味しかなく、一方は人間だが、他方は人間ではないという意味には決してなりません。

¹³ 「日本語」が、さまざまな日本語をそのトークンとしてもつタイプの存在者を指す単称名であると考えすることは不可能です。なぜならば、タイプ/トークン関係において、トークンは具体的対象でなくてはならないのに、ここで論じてきたように、個別の言語としての日本語は抽象的対象であるからです。

人工言語の場合も、「一階述語論理の言語」のような形式的な人工言語の場合も変わりません。一階述語論理の言語と言っても、さまざまな定式化があり、異なる定式化は、同じ一階述語論理の言語ではあっても、異なる言語を生むと考えられるからです¹⁴。

先に私は、言語の変化を色の変化にたとえましたが、よりいっそうそれに近いのは、自動車のモデルの変遷のような場合です。「カローラ」というのは車種の名前です。これは一見したところ、単一のタイプの存在者を指す単称名のようにみえます。しかしながら、「カローラ」と呼ばれる車種は、それが登場して以来、何度もモデルチェンジをしており、その都度「E90系カローラ」とか「E100系カローラ」といった異なるモデルが存在してきました。こうしたモデル名は、具体的存在としての車を指すものではなく、タイプの存在者を指します。したがって、「カローラ」とは、単一のタイプを指す単称名ではなく、複数のタイプにあてはまる一般名であると考えられなければなりません。そして、カローラの「変化」について云々することは、実は、時間の経つにつれて、カローラという種類に属する異なるタイプの存在者のトークンが存在し始めたという事態について語っているのだと解釈されます。同様に、カローラの地理的「変化」は、海外向けのカローラにさまざまなモデルがあるという事実によって説明されます。

「カローラ」という名称に包摂されるさまざまなタイプの存在者は、カローラ特有のデザインや機能といったさまざまな特徴においてたがいに類似していなければなりません。それだけでは十分ではありません。まず、ある車種が「カローラ」の一種であるためには、それは特定のメーカー、つまり、トヨタ、によって作られたか、あるいは、そこと提携して作られたものでなくてはなりません。まったく別のメーカーが、トヨタとは無関係に、カローラに属する車種のひとつとそっくりの自動車を製作して販売してもそれはカローラの一車種のひとつとはみなされません。

では、ある車種がカローラに属するためには、それが、カローラに属する他の車種と全般的に類似して、かつ、トヨタによって、あるいは、トヨタとの提携によって設計され製造されていけば十分でしょうか。十分でないことは、つぎのような可能性からわかります。すなわち、トヨタの設計部門のうちのあるチームが、カローラが存在を知らないまま設計して生産した自動車が、カローラに属する車種のひとつと区別つかないほど似るといった可能性です。これは、現実にはありえないような可能性ではありますが、可能であることはたしかであり、この場合新しく設計された車種はカローラに属するとみなすべきではないでしょう。ここで欠けているのは、すでにカローラに属する車種との因果的な関連です。要するに、カローラの一車種である

¹⁴ 異なる定式化は異なる言語を結果するのではなく、同一の言語の表記上のヴァリエーション (notational variant) を結果するだけであると考えるのが、形式言語の通常の扱いですが、こうした考え方のもとで、言語の同一性の正確な特徴づけを与えることは、きわめて困難な課題になると思われます。

ために必要な条件は、単なる類似性ではなく、因果的に関連付けられた類似性なのです。

車種について言えることの多くは、言語についても言えます。「日本語」という名称があてはまる無数の言語は、その統語論および意味論において相互に類似していますが、その類似性は因果的に関連付けられた類似性でなくてはなりません。もちろん、時空的存在ではないタイプの存在者である車種や言語そのものが因果関係に入ることは不可能ですから、この言い方には説明が必要です。車種の例で、因果的な関係に立つのは、車種そのものではなく、車種的设计および製造といった出来事です。カロラの新しいモデルが、「カロラの」と言われるのは、その設計がカロラの既存のモデルから出発してなされたからです。言語の場合に因果関係に立つのは、言語ではなく、言語の使用です。言語 $\langle C(V), M \rangle$ が「日本語である」と言われるのは、それが、同様に「日本語である」と言われる言語と類似しており、かつ、その使用が、この言語の使用と因果的に関連している場合です。日本語を話す人々 P のあいだで育ったひと A が、日本語を話すようになるのが、その典型のひとつです。 A による日本語の使用が、 P による日本語の使用を原因としていることは明らかです。もうひとつの典型は、同一人の使う日本語が変化して行く場合、つまり、時間が経つにつれて異なる日本語を一人のひとが使うようになる場合です。ある個人による、ある言語の使用が、それ以前の時点での類似した言語の使用に因果的に依存しており、また、先立つ言語が日本語に属するならば、後に来る言語もまた日本語に属すると判断されるでしょう。

わたしたちの日本語は、語彙が増えるたび、また、語法が変化するたびに、以前とは異なる言語となって行きます。にもかかわらず、同じ日本語であり続けるのは、いま述べたような理由によります。しかしながら、極端な変化、あるいは、長年のあいだの変化の累積は、もはや日本語に属するとはみなされない新しい言語を生み出しえます。因果的な関連だけではつなぎとめることのできないほど大きく類似性が失われてしまう場合です。ここで類似性が問題であるということは、日本語と日本語でないものとのあいだの境界は、色のあいだの境界のように、曖昧であることを意味します。「日本語」のような言語名が普通名詞である以上、その適用の境界が曖昧なことに不思議はありません。なぜならば、こうした曖昧性は普通名詞の多くに共通する特徴だからです。

日本語と日本語でないもの、英語と英語でないもの、これらはきっぱり分けられるものではなく、その境界は常に曖昧です。しかし、このことは、ひとつひとつの言語がぼんやりとした輪郭しかもたない曖昧な存在であることを意味しません。日本語や英語の輪郭の曖昧さは、そのどちらもが無数と言ってもよいほど多くの異なる言語を包摂するために生じるだけのことであり、それはあくまでもわれわれの分類方法に由来する曖昧さにすぎません。

参考文献

- [1] Bromberger, S. 1989 “Types and tokens in linguistics” in A.George (ed.), *Reflections on Chomsky*, pp.58–89. Oxford: Blackwell.
- [2] 飯田 隆 2002 「言語の知識」野本和幸・山田友幸（編）『言語哲学を学ぶ人のために』東京：世界思想社
- [3] 大森荘蔵 1976 『物と心』東京：東京大学出版会
- [4] Parsons, C. 1980 “Mathematical intuition” *Proceedings of the Aristotelian Society* 80 (1980) 145–168 [邦訳：チャールズ・パーソンズ、斎藤浩文訳「数学的直観」飯田隆編『リーディングス 数学の哲学』（1995年、勁草書房）所収]
- [5] Wetzel, L. 2009 *Types and Tokens: On Abstract Objects* Cambridge, Mass.: The MIT Press.